



上尾市長 畠山 稔氏

市長のメッセージ

上尾市は2021年8月に人口23万人を突破しました。人口減少社会が進む時代にあっても今なお発展を続けています。

豊かな自然との調和を保ちつつ、現在整備が進む新大宮上尾道路の延伸ならびに上尾南ICの開通により都心へのアクセスがさらに向上していくほか、大型商業施設が進出するなど、利便性の高い住環境がさらに整いつつあります。

また、切れ目ない子育て支援や教育環境の充実を図ってきた結果、年少人口や子育て世代の転入超過数は全国上位を記録し、「選ばれるまち」としての成長を確かなものとしています。

今後も「みんなでつくる みんなが輝くまち あげお」の実現に向け、全力で邁進してまいります。

はじめに

上尾市は埼玉県南東部、関東平野のほぼ中央に広がる大宮台地上に位置し、市域の多くは平坦な地形で形成されている。江戸時代、中央部を南北に、五街道の一つ、中山道が整備された。上尾は中山道六十九次のうち江戸から五番目の宿場「上尾宿」として栄え、旅人が一日で歩く10里（約40km）、江戸より最初の宿泊地としてにぎわいをみせた。

南東部の原市には脇往還（街道の脇道）沿いの市場町として栄えた記録が残る。宿場から宿場に荷物を送り継ぐ「宿継ぎ」の役割を担ったことで陸運の拠点となった。南西部の平方には荒川舟運の河岸が置かれ、物資の集散が行われた。陸運と舟運の双方に恵まれた上尾は、交通の結節点として発展していった。

明治に入りJR高崎線が、1983年には埼玉新都市交通伊奈線（ニューシャトル）が開通。さいたま市北部に隣接するベッドタウンとして成長し、現在人口は23万人を超え、市は今も着実な発展を続けている。



物流拠点の整備が続く上尾道路（堤崎付近）
出典：関東地方整備局ウェブサイト
(<https://www.ktr.mlit.go.jp/oomiya/oomiya00118.html>)

県内有数の交通結節点の「今」

市の発展を支えてきた中山道は、現在「国道17号」に継承され、今も関東広域の交通を担う幹線道路として重要な役割を担う。その西側を並行する「上尾道路（上尾バイパス）」は、県南部の新大宮バイパス、県北部の熊谷バイパスを連結し、広域をつなぐ重要な交通ネットワークの中心を成している。2016年4月には、上尾道路が首都圏中央連絡自動車道（圏央道）・桶川北本インターチェンジまで延伸し接続した。これにより交通利便性は一段と高まり、沿道地域の土地利用の需要が拡大した。さらに、上尾道路と新大宮バイパスでは、首都高速埼玉大宮線の延伸として、「新大宮上尾道路」が2016年に与野～上尾南（仮称）出入口までの区間で事業化された。高架構造の自動車専用道路を併設し、南北の高速道路を直線的に結ぶ工事が進行中だ。将来、都心の首都高速と北関東の高速道路網は一体化し、関東広域に至る一大交通ネットワークの形成が展望されている。将来の物流需要の増大を見据え、沿道では企業の進出が活発だ。

高まる土地利用需要に対し、市は都市計画マスタープランに基づき、産業基盤として合理的な土地利用を推進している。企業の集積は地域経済の発展可能性を広げる。雇用の創出、交通量の増加、住居需要の拡大など、市内には新たな活気が生まれている。大型商業施設も市に進出した。県内有数の交通結節点は今なお強化され、上尾市は地域産業を支える交通拠点として、今後も一層の発展が期待されている。

上尾市概要

市の木 かし 市の花 つつじ 市民の木 あおき

人口(2026年8月1日現在)	230,699人
世帯数(2026年8月1日現在)	111,195世帯
平均年齢(2026年1月1日現在)	48.2歳
面積	45.51km ²
製造業事業所数	245所
製造品出荷額等	4,644.6億円
卸・小売業事業所数	1,076店
商品販売額	6,677.1億円
農業産出額	12.9億円
一人当たり都市公園面積	4.26m ²

資料:経済産業省「経済構造実態調査」ほか



主な交通機関

- JR高崎線 上尾駅、北上尾駅
埼玉新都市交通伊奈線(ニューシャトル) 原市駅、沼南駅
- 圏央道 桶川加納ICから市役所まで約5km

✨ 多くの「県内初」。子育て環境No.1のまちへ

「選ばれるまち」に向けて、市は充実した子育て環境の整備に取り組む。「0歳から輝くまち from AGE-0^{エイジゼロ}」のスローガンのもと、子どもとその保護者を支援する体制を整えている。24時間利用できる無料の「小児科・産婦人科オンライン相談」を実施するとともに、本年6月には、市内に14カ所ある乳幼児と保護者が交流できる「地域子育て支援拠点(あげっこベース)」のうち、11カ所に相談機関の役割を整備し、身近な地域における相談体制を強化した。訪問支援も行い、家庭に寄り添う仕組みが備わっている。保育所とこども発達センター、児童発達支援センターを併設した「AGECOCO^{アゲコココ}」では、子どもたちが交流を通じて多様性を認め合い、共に育ち合える環境の整備にも取り組んだ。

市内の公立保育所では、県内初となる全児童分の午睡ベッドの導入のほか、「おむつの定額利用サービス」を開始するなど、保護者の負担軽減と保育環境の向上にも積極的に取り組んでいる。

こうした取り組みの数々は、2018年度にスタートした、妊娠期から子育て期まで切れ目のない包括的な支援を行う「あげお版ネウボラ」が起点となったという。

教育分野では、英語教育にも力を入れている。市内全小中学校に外国語指導助手(ALT)を配置するほか、市内保育所において外国人指導員などによる英語体験を実施するなど先進的な取り組みが進む。

✨ スポーツが育む市民の元気と活力

市は人生100年時代を見据え、2022年に「上尾市スポーツ健康都市宣言」を掲げた。より多くの市民がスポーツを通じて健康づくりに取り組める環境整備を進めている。2024年にスタートした健康ポイントアプリ「あげお健康+^{おらす}(あげぷら)」は、市民の関心が高く、タニタヘルスリンクのアプリを導入する自治体の中で初年度登録率が全国1位となった。400以上の事業と連携したイベント参加や、歩数に応じてポイントが得られ、抽選で電子マネーが当たる。アプリを通して、市民の健康づくりの意欲を高めている。

多様なスポーツ施設が集積し、市内ではプロバレーボールチーム埼玉上尾メディックスのホームゲームも開催される。プロスポーツを身近に楽しめる環境があり、市民がボランティアとしてイベント運営を支える風土もある。本年で39回目を迎える上尾シティハーフマラソンは、国内トップランナーも参加する。古くは旅人が往来した上尾の道を、市民ランナー達が今年も力強く駆け抜ける。(齋藤康生)



上尾シティハーフマラソンの様子